

Title	『疱瘡除』と『寿福請取帳』翻刻と解題： 病気見舞い本における疱瘡神と麻疹神
Sub Title	Hōsō yoke and Jūfuku uketori chō : transcription and introductory notes. The gods of smallpox and measles in illustrated books conceived as sympathy gifts
Author	津田, 真弓(Tsuda, Mayumi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2023
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidō Bunko Institute). No.57 (2022. ) ,p.405- 433
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20220000-0405">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20220000-0405</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『疱瘡除』と『寿福請取帳』 翻刻と解題

―病氣見舞い本における疱瘡神と麻疹神―

津 田 眞 弓

## はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行を契機に、赤色の濃淡だけで印刷された、紅摺疱瘡絵本では現存最古として知られる十返舎一九作・

貞之画『疱瘡請合軽口噺』(駿河屋半兵衛板、享和三年刊か)を注

釈し(『太平餘興』七、二〇二〇年十一月)<sup>②</sup>、また「Smallpox

Illustrated Books and Their Publication : What We Can Learn From

Jippensha Ikkū's *Karukuchibanashi*」(疱瘡絵本が出版される時

―十返舎一九「軽口噺」の再版から考える可能性)と題する

発表を行った(二〇二二年五月、於ライデン大学)<sup>③</sup>。両者の報

告で痛感したのは、疱瘡絵本を考察するには、麻疹の流行を視

野に入れなければならないということ、そして浮世絵に描かれる疱瘡神や麻疹神を考えるには近接して作られていた草双紙が有効な資料だが、残念ながら紅摺絵本を中心に紹介されてきたため、全体像を把握するにはまだ十分ではないということである。

そこで本稿では、先行研究が紹介していない草双紙における疱瘡神と麻疹神の姿を紹介するものである。いずれの作もそれぞれに描かれた像が、後続の作に影響を与えたもので、かつ今回翻刻をお許しただいた機関のみに所蔵が確認される貴重な資料である。日本の感染症をめぐる文化の考察に寄与することを願う。

## 赤本『疱瘡除』（ほうそうよけ）

奥村利信画、奥村屋板。一般的な青本の装訂で作られているが、木村八重子『赤本黒本青本書誌（赤本以前之部）』（青裳堂書店、二〇〇九年）は赤本に立項しており、これに従う。刊年の手がかりは、旧蔵者が「寛延二二（一七四九年）」と表紙の見返しに残したメモだが、画工の奥村利信の活動期からして、十八世紀の中庸とみて概ね間違いないかと思われる。

なお前述の一九『軽口噺』の序文に「趣向は疱瘡の赤本もどきにやらかしたれば」とあり、もともとあった「疱瘡の赤本」を黄表紙風に書き換えたものだと述べている。つまりその昔に、一九の吉原通いを材料にする戯けたこの作とは違う「赤本」が存在していたとすれば、まさにそれに適したものである。一九の「赤本」という言が紅摺の本をさしているかは悩ましいところだが、周知の通り「赤本」は草双紙の古い様式を、時に草双紙全体をさしもある。たとえこの本が青本様式の本であっても、「疱瘡の赤本」という言い方に間違いはない。無論、木村が指摘するように赤い丹表紙の本作があった可能性もある。

物語は、清貧の男の家に、役行者の告げて疱瘡神がとりつき、

子供の疱瘡を見守る一方、家にいた貧乏神を追い出して富貴に  
なるよう手伝う話。笹湯（酒湯）の祝いにちなんだ酒屋を開く  
が、底なしに飲む狸々たち（赤の縁）の行きつけになり大繁盛  
し、彼らが住む龍宮の黄金を得る。貧乏神が助力を頼んだ悪魔  
に疱瘡神は敵わなかったが、鯰三八などを名乗って現れた鞍馬  
の毘沙門天らが危機を救う。疱瘡神は、鮑の貝に「鯰三八宿」  
と書く魔除けを伝受する——というもの。

ここに書かれた疱瘡神は、若い垂髪の神官の姿に描かれ、常  
に主人公一家を守る役割をしている。注目すべきは、疱瘡神の  
存在意義を子供が胎毒によって得た「悪血を払い出し給ふ神」  
という説明で、こうした背景故に、疱瘡神は神官を模した人々  
を守るありがたい存在として造形されている。この性質や姿は  
そのまま鳥居清長画『童麻疹後』（安永五年（一七七六）刊）  
に受け継がれる。これは麻疹の流行時に、氏神の明神に疱瘡の  
神はいても麻疹の神がいないと疱瘡神が呼ばれ、麻疹に罹患し  
た人々の病後の食生活を見守る話で、本作同様、疱瘡神は品行  
方正で温和かつ頼もしい若者の像を結ぶ（翻刻を別稿に用意）。

この疱瘡神の姿は、一九の『軽口噺』の後編『子宝山』（刊  
年未詳）に、そして出来の悪い疱瘡神が登場する『軽口噺』で

はそのさつそうとした所は排除されているものの、衣裳については引き継がれ、さらに本稿に翻刻を載せる文政七年刊『寿福請取帳』の麻疹の神（麻神）にも使用される。なお一九には、合巻『仇のわらひましやぐ討湯尾峠孫杓子』（歌川国貞画、文政二年（一八一九）刊、山本久吉板）のように一般的な読み物に疱瘡神を登場させているが、敵討ち物語にふさわしい、おどろおどろしい造形に変えられている。

その意味で本作は、黄表紙以前から続く、疱瘡見舞いに使われた、あるいは使われたと思しい草双紙における伝統的な疱瘡神を伝える資料であると考ええる。

書誌事項と翻刻は次の通り。

- 書名 疱瘡除（ほうそうよけ）
- 著者 鶴月堂 奥村文全利信（画）
- 書型 中本（十七・七cm×十三・五cm）
- 装丁 原装、藁色の無地の表紙、上下巻にそれぞれ題簽と絵題簽が残る。
- 柱題 「ほうそう」
- 板元 「通塩町（瓢箪の紋）奥村」。奥村屋源八か利信の可

能性がある。

■刊年 旧蔵者の見返しへのメモに「寛延二」（一七四九年）とあり、それに従う。

■所蔵 五島美術館 大東急記念文庫（44-26）

#### 凡例

◆翻刻は読みやすさのため、全体に句読点、濁点などを補い、ひらがなばかりの草双紙本文は、適宜漢字に直し、ふりがなにもとの平仮名を残した。原文に付されているふりがな、印等は《 》で囲った。

◆台詞の書き入れは、一字下げを施し、発話者を（ ）に示した。

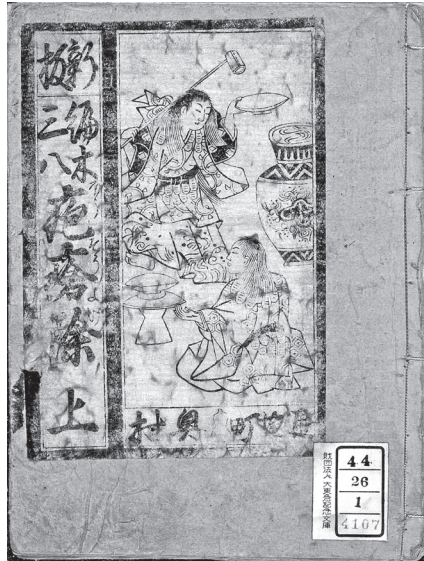


図1 『疱瘡除』上巻表紙

【上巻表紙】  
 新編 三味夜春除<sup>ほろよち</sup>  
 板新 編末  
 三八  
 通塩町 奥村  
 上



図2 「抱瘡除」一丁表

【一丁表】

若狭の国、小浜といふ所に、小枝六郎次といふ者あり。生まれつき正直に情深き人あり。有徳なりしが、貧なる者あれば、身を惜しまず救ひし故、おのづと貧しく暮らしけり。其頃、役優婆塞と人、深山を踏み分け、靈智となし給ふ。ある夜、神の告げありて、六郎次が家を訪ね来たり給ふ。

(六郎次)「私、六郎次と申者、見苦しとまづお「欠」りなされよ」

(六郎次妻)「あなたが役行者さまか」

【一丁裏・二丁表】

かくて六郎次が家に泊り給ひ、夜もすがら物語りありて後、又老人の山伏、いづく共なく出来り。ともに山々の物語りする。行者、女房が抱きたる幼子を見給ひ、彼は近きうち、瘡瘡を病むべし。此病ふは、人、胎内にありし時、色々の悪血にあいし



図3 「疱瘡除」一丁裏・二丁表

を払ふ病なり。

これも神のなし給ふ所にて、即ち、その悪血を払い出し給ふ神あり。名付て疱瘡神といふ。世の人此神と付給ふ故、病ふを受くると思ふはひが事也。人、懐胎してより十月がうち、身もち固く食物までも教えの如くせば、いづれ共疱瘡は軽き事と知るべし。

近きに此神も来り給はん。告げあらば、教への如く、祭るべし。思わぬ幸いを得て、今まで汝がなしおいたる善根の花咲き、身の上、子孫、繁盛すべし。

(山伏)「御亭主、我らが主人は神司でござるぞ。少しも疑われな。

我らが名は前鬼と申す」

(六郎次)「生き神の仰せ、何疑い奉らん。末世の語り伝へにいたしませう。何事によらず、私、相應の御用は仰せくだされませい」

(六郎次妻)「こちの人、あなたへよう御礼を。もうく、冥加もない、ありがたい事でござんす」

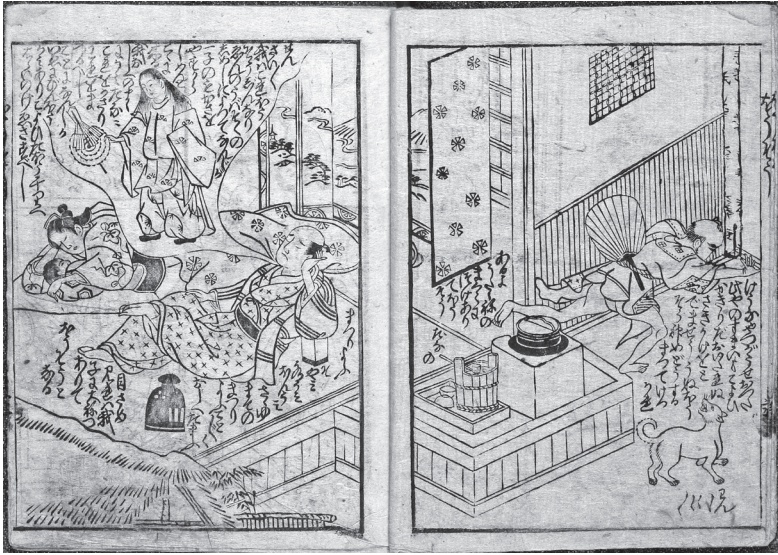


図4 「疱瘡除」二丁裏・三丁表

【二丁裏・三丁表】

(貧乏神)「凶な奴がうせおつた。此家の住まいも今宵かきりだ。追い出されぬ先、駆落と出ませう。うぬ、疱瘡神め。どうする。待つてけつかれ」

(犬)「わん~~~~」

ある夜、うた、寝の枕に告げありて、疱瘡棚の祭りよふ、序病、水膿、本膿、笹湯までの祭りよふ、悉く教へ給ふ。

目覚め、見れば、我子に大熱ありて、疱瘡となる。

(疱瘡神)「千歳千歳、我はこれ疱瘡神なり。役優婆塞の示しによつて、汝が一子の痘瘡を安からしめんと、こゝに来る。我教へのまゝに、神棚にこれを飾り、これを祭るべし。ことに汝が家に、貧乏神あり。今宵他方千里へ払い退け得さすべし」





図5 「瘡瘡除」三丁裏・四丁表

【三丁裏・四丁表】

教への如くせしま、に、前後十二日の日数にて、今日は笹湯の祝ひなり。

(六郎次妻)「今度の祝いは何しても飽きはなけれど、人手はなし。ほんの心ばかり。もし、吸物のお加減がよいぞへ。お松、それ、お銚子はあるかや」

(正客)「御亭主今日は笹湯の御祝儀めでたい〜。とかく、めでたいといふと、酒でござる。なんと、酒屋をお始めなされぬか。酒は憂いの筈と申せば、銭金を掃き込みませうぞや。何と太次兵衛殿、どうでござる」

(太次兵衛)「いかさま、わしらも酒屋と兼ねて思ひつきおりまする。

(六郎次)「あ、いかさま、酒屋はよふ小遣い帳を汚すものでござる」

(かい庵)「わざとおさんを直してさしあげましょう。此度の役、人は自慢ではござらぬが、此くわひ庵、一生の手柄でござる。あてさ、人参とてたかりますてい」

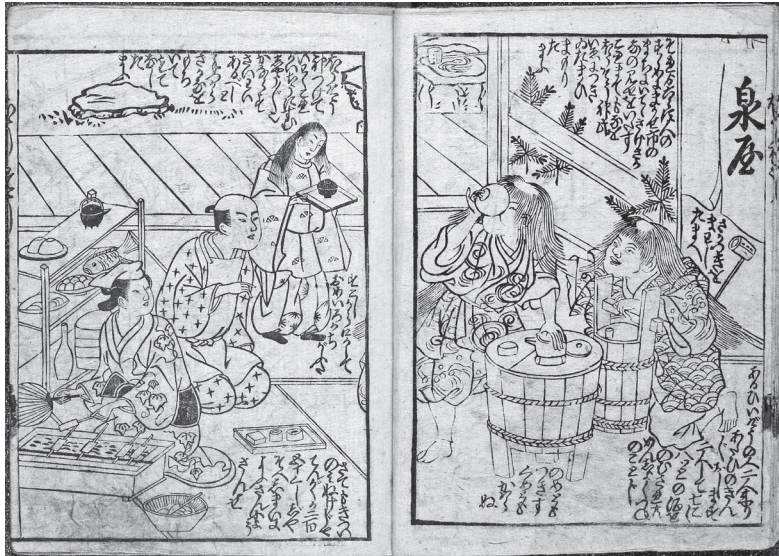


図6 「疱瘡除」四丁裏・五丁表

【四丁裏・五丁表】

それより六郎次、人の勧めにまかせ、市の町に出て、酒肴の店を出す。これまでもなを疱瘡神、此家につき居給ひ、守り給ふ。ある日、異形の人二人来り。値の金銀惜しまず、二人して七石八斗の酒を飲む。され共、面色常の如し。疱瘡神告げて曰く、これ、海中に住む狸々也。必ず幸いあるべしと、手づから肴を用いてもてなし給ふ。

(狸々右) 「盃を回し給へ」

(狸々左) 「飲めども尽きず。汲めども変はらぬ」

(六郎次) 「少し辛口かして、お目色が違ふた」

(六郎次妻) 「さてもきつい飲み抜けじや。田楽が二百五十串じやぞへ。しまいによふ算用さんせ」

(店の暖簾) 「泉屋」

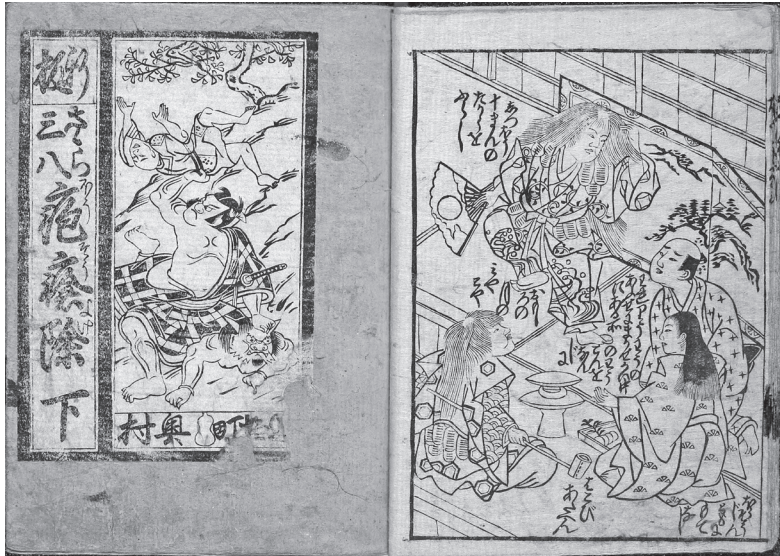


図7 「抱瘡除」五丁裏・下巻表紙

【五丁裏】

抱瘡神、共にもてなし。

(猩々上)「我、龍王の仰せにまかせ、海中にある所の黄金を、

汝に、運び与へん」

(猩々下)「七宝十万の宝を降らし、おもしろの月の都や」

【下巻表紙】

板新 / さくら 抱瘡除 下

通塩町 奥村



図8 「抱瘡除」六丁表

【六丁表】

その後、数々の狸々来り。六郎次が家にて、酒を飲み、楽しむ。

(狸々右)「かの龍宮に噂する、六郎次が家はこれでござる。

まづ寄りて、酒を汲み、楽しみませう」

(狸々左)「いかさま、龍王の仰せの如く、諸神の守りある、

家の内と見へます」

(店の暖簾)「泉屋」



図9 「疱瘡除」六丁裏・七丁表

【六丁裏・七丁表】

龍宮より黄金の貢ぎ。

(猩々右上)「此一筈は、傷なしのよりだぞ」

(猩々右中央)「これは八大龍王様の巾着銭の分じやげな」

(猩々右下)「此中、打飲み倒した代はりに、働かずばなるまい」

(猩々左上)「こりや、乙姫様の鱗のこぼれじや」

(猩々左中)「棒組、戻りに酒手か。しつかりたんべいな」

(猩々左下)「おうさ、顔の白くなるまで飲め」



図10 『抱瘡除』七丁裏・八丁表

【七丁裏・八丁表】

三下りへ寝間着のきぬの端薄し。[\*節の印あり] 辛いぞ、憂いぞ、なんとせう。

(六郎次) 「何かなと存じ、舞子を御馳走に御目にかけます。御相手にとはいかゝながら、一つ召しあげられくたされませう」

(狸々左) 「いや、何よりのおもてなしじや」

つんてちりりんく、イヤ、とつてつてんつんとん

(たつや) 「狸々さんの声は美しい甲じや」

(女) 「たつやさん、あの声に呂があらふものなら、庄五郎

さんに生き写しじや。単帯を望まんせ」

貧乏神、また此家をうがう故、抱瘡神、払い出し給ふ。

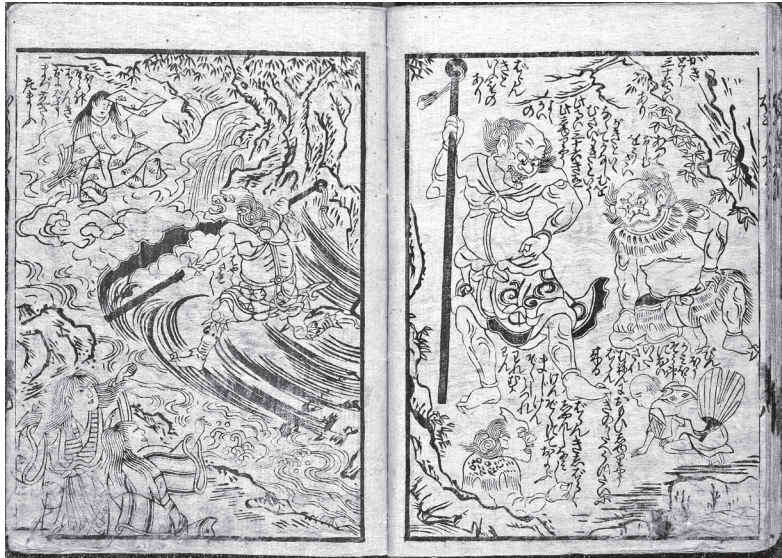


図11 『瘡瘡除』 八丁裏・九丁表

【八丁裏・九丁表】

餓鬼道三十六類あつて、惜しむを有財餓鬼と言ひ、なくて悲しむを無財餓鬼と言ふ。此類三十六鬼有。此首領欲界のばらんきといふ者あり。

貧乏神、瘡瘡神に追い出だされ、無念に思ひ、首領ばらんきの方へ訴いに來る。

ばらんき暫く思案し、並々眷族にて及ぶまじ。眷族引連れ、我向かわん。

瘡瘡神、ばらんきに及ばず。まづ立去り給ふ。

(ばらんき)「早く去れ〜」

【九丁裏・十丁表】

こ、に觥三八とて、大力にて、殊に鞍馬毘沙門天に祈り、人の窮難を救わんと誓ひ、幻術の法を授かりし人あり。多聞天の告げによつて六郎次が難を救いに來り。



図12 『抱瘡除』九丁裏・十丁表

悉く、悪鬼をつかみひしく。

(三八)「観念しおらふ。もう欲界へは帰さぬ、かたはし、  
両国で見世物だぞ」

(鬼)「あ、もう、命や旦那のものだ」

(鬼)「あい、どうなりと、きみ「欠」仰せは背きま

「欠」。さりながら、軽業は下手でござります」

又壹人、若狭六郎左衛門と名のり、三八に力を合働き、首領ば  
らんきを投げ倒し、貧乏神を弓手にかい込み、青海の外へ投げ  
飛ばす。

(六郎左衛門)「愚かや、汝、我は鞍馬の毘沙門天。仮に姿  
を現すなり。

六郎次が正直を感じて、若狭六郎左衛門を名乗るなり」  
此喜びに抱瘡神、庭にありあふ鮑の貝を取、鯨三八宿と書いて、  
六郎次に賜り、これを下げたる門には必ず抱瘡軽かるべし。世  
上にこれを広めよと、下し給ふ。今の世まで鮑に書き付け吊す  
こと、この言われとかや。



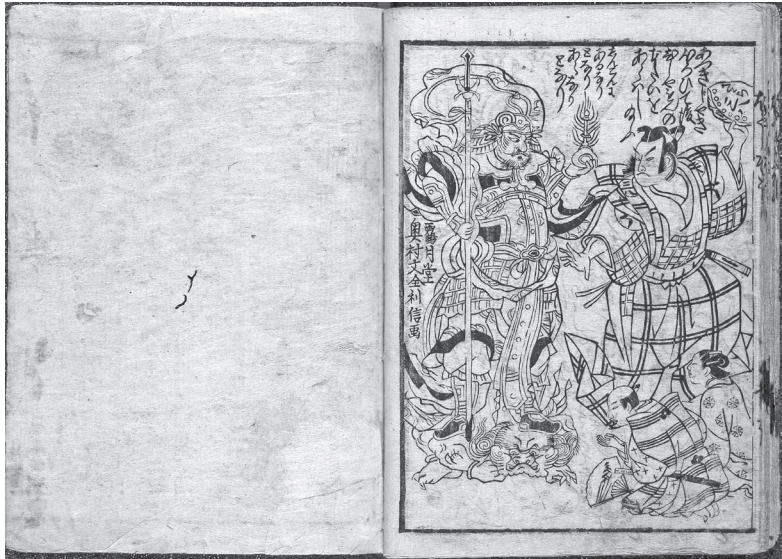


図13 『抱瘡除』十丁裏

鶴月堂 奥村文全利信画

【十丁裏】  
 悪鬼、邪鬼、滅びて後、毘沙門の本体を表はし給ふ。  
 真言に、あるなりとなりあらなりとなり。

## 合巻『寿福請取帳』（じゅふくうけとりちよう）

十返舎一九作、歌川国安画、文政七年（一八二四）刊の作。合巻時代の作らしく多弁だが、十丁と短く、好色な魔物が笑いを誘う黄表紙・滑稽本的な作風である。巻末に示されるように、一九が本名の重田貞一名義で同年に刊行した『麻疹養生伝』に連動している。この書には、一九の戯作二種が以下の通り広告されている。

西邦麻疹雑談（全三冊） むかし西国にて麻疹はやりし時

めづらしきものかたりありしを聞き伝へ記す

《右之通／麻疹に》 寿福請取帳（全一冊） はしかのこと

をおもしろおかしく書つゝりたるなれば麻疹のお見舞いに

よき絵ざうしなり（京都大学蔵）

残念ながら「西邦麻疹雑談」の所在が確認できず今後の出現に期待したいが、両者は右の通り、一九の真面目な医学的情報書に連なる。文久二年（一八六二）四月から七月に改を受けた浮世絵や摺物三十五点を点検した加藤光男によれば、『麻疹養

生伝』は、葛飾蘆庵『麻疹必用』（文政七年刊）と共に、それらの主たる情報元となっている。

板元は、葛屋重三郎・鶴屋喜右衛門・鶴屋金助。書き方から判断して最後の鶴屋金助が主たる板元と思われる。この三軒は、同じ文政七年刊の作者不明『麻疹御伽雙紙』（葛屋重三郎・鶴屋喜右衛門・鶴屋金助・山田佐助板）にも関わっている。一九の『軽口噺』の後印本の板元でもある鶴屋金助がかかわった麻疹関連の二作は、作中に麻疹神を出している。前述の通り一九はそれまでの疱瘡絵本関連で描かれてきた疱瘡神の姿に準じる形で、病の邪気や熱に山東京伝の悪玉（顔は○に悪の字、禪姿の魂が多出する）を利用して描いている。『麻疹御伽雙紙』は『麻疹鬼』として小鬼が登場人物の周囲で動き、悪玉の影響下にある姿で描いた。前述『葶麻疹後』に、疱瘡の神はいても麻疹の神がいないとされるように、式亭三馬『麻疹戲言』（享和三年刊）も、「此ころの人は、疱瘡鬼の合棚に、麻疹の神のあとまで心得けん（中略）片腹痛き事なれども、しばらく俗にしがたひて、さらば神とも申べけれど」と、人々の流行に従って麻疹神を題材にするものの、その像を結び切れていない。この二人が結ぶ像が違うことから窺えるのは、当代において疱瘡

神のように共有されていたとおぼしいイメージがなく、作者それぞれが似たものから想起して形作る必要があったと考えられる。ともあれ、文政七年の流行で描かれる麻疹神は、川添裕が『江戸にラクダがやって来た』（岩波書店、二〇二二年）などで紹介した合巻『和らくだのせかい合駱駝之世界』（江南亭唐立作、歌川国安画、文政八年刊）における図<sup>⑦</sup>より早い時期のイメージであり、感染症を巡る文化を考察する際に、記憶しておくべきものと考ええる。

さて、本作の内容はたわいなく、鬼や麻疹の神、風邪（本文では風）の神が美しい女房に惚れて引きおこす騒動。恋の恨みに一家は麻疹で殺されかかるが、升麻葛根湯の威力で病が治り、悪神たちも反省をし、子々孫々まで長久の栄え、めでたしとなる。巻末に「伏裏」（ふくりん、広告文などの冒頭に記される語）として、『麻疹養生伝』から抜粋した、食してよいもの、多食してはいけないもの、絶対に避けるべきものを列挙している。一九の情報源は、広告や『麻疹養生伝』によれば、甲斐の徳本なる医師の教えだという。張仲景の古医方を重んじた伝説的な医師、永田徳本（知足齋、一五三一一六三〇）かと思われるが、一九が具体的にどのような資料に基づいたかは今後の課題としたい。

書誌事項と翻刻は次の通り。

■書名 寿福請取帳（じゅふくうけとりちよ）、角書「右之通麻疹に」（序題）

■著者 十返舎一九（作）、歌川国安（画）

■書型 中本（十七・七cm×十二・二cm）

■装丁 改装か、藁色無地。題簽などは欠けている。

■柱題 「寿福」

■板元 蔦屋重三郎・鶴屋喜右衛門・鶴屋金助

■刊年 文政七年（一八二四）

■所蔵 武田科学振興財団 杏雨書屋（乾々2147）

#### 凡例

◆本文については基本的に『疱瘡除』と同じ。ただし、『寿福請取帳』の序文と巻末部分は、原文通りに翻刻した。

◆本文中にある文の続きを示す合い印は様々な形が用いられているが、ここでは「**ㄨ**」で統一した。

◆一部、漢字に直すことで地口<sup>じぐち</sup>がわかりにくい部分には「**（**」を付して翻刻者の注を補った。

◆所蔵者の意向に従い、翻刻のみ行い、一部の図版を示す。

【二丁表】

〔右之通／麻疹に〕 寿福請取帳序

世に親仁となりし有難さには、今麻疹のはやるにも頓着せず、まぐろのさし身に樽酒の口をひらきて呑たいが序病のはじまり、かせるたけは酒屋をかり、書出しの出揃ふ迄は晦日しらずの楽み、三豆湯もいらねは枝をむしるとて、眼をつゝくあやまちもなく、葛根湯よりも八文の湯に入、敗毒散の煎やう常のとをりの心もち、おのれ病ざればとて見てもゐられず、麻疹する小供衆へお伽にもと、こちつけしは少しも差合祭物でなき咲ひの種本、御覽じて肥立給へ、それこそ寿福請取帳と題することしかり。

文政七甲申春

十返舎一九誌

【二丁裏・二丁表】

\*以下、本文は平仮名を漢字に直した。

文政七年正月六日は節分にて、その夜は年越として、家々に赤鯛を門に差すは、鬼の来るを内へ入れまじきとてのことなるに、この節、麻疹はやるとして、十八軒の柎の葉を二枚づゝ、集め、麻疹のまじないとすることはやり、家々の柎は皆人にもらはれて、門に差したるを二枚づゝ、段々とむしり取りて後は、門の柎一枚もなき故、鬼ども来たりて柎なければ、なんの恐れ

もなく、皆家々の内へ鬼共のかく〜と入り来たる故、女子どもは皆々恐れてうろたへ逃げまわり大騒ぎをやりける。

(老女) へヲヤ〜この鬼は、若い女をとらへて、いやらしい。それよりわしをとらへて、此顔のたんこぶでも取つて下さい。

(鬼) これさ〜、そのやうに怖がることはない。わしはこのやうに顔は怖らしいけれども、心意気はたいてい優しいことではない。そして床が上手だから、まあちよつと抱いて寝てみる気はなしか、どふだ〜。

(女) へアレ〜鬼が来たのふ。恐ろしや〜。

(下の鬼) へ今夜は豆まきほどあつて、そこら中に、年増の豆や新造の豆がまいてある。どれ〜ひろつて食いませふ〜。

へこいつは美しい髷だはへ。節分の豆よりも、お前の豆がたべたい。それも年の数ほど。わしはこれでも六十八になるから、それだけで、たくさん〜。

【二丁裏・三丁表】

節分の夜、門々に柎なき故、鬼ども皆家々へ入りけるが、その

中にいたつて女好きの鬼、ある家の女房に、とんだ美しきがありしを、ちらと見るより、この鬼こたへられず、折節男切れの見へぬを幸い、この鬼女房にしなだれかゝり、くどきけるを、女房は恐ろしくがたく震ひて逃げんとするを逃がさず、無理無体にしがみつきて、頬べたへこすりつき、さまざまいやらしき最中、この家の亭主奥より出きたり、この体を見て鬼を引き退け、踏み倒しける。鬼よりは思ひの外、豪勢なる亭主にて、力強ければ鬼を縛りあげ、おのれ間男め、斬り殺すぞと言われて、この鬼大きにうろたへ涙をこぼして、どふぞ命はお助け下さりませと詫びる。しからば間男の首代七両二分渡せといへば、鬼は胆を潰し、たとへ命は取らるゝとも、なんとして七両二分はさておき、一文も銭金はござりませぬ。せめてこの着ているものでも、剣ぎ取つて下さりませと申たけれど、これも御覽の通り、裸にて身についたものとは、禪ひとつ。何とぞたゞすまして下さりませと、泣く泣く詫びごとしける。

(鬼) へナニ私はなんともいたしませぬが、こゝのかみさまのほうから、さても好いたらしい鬼殿だと、あちらからかぶせたのでござります。私は生れついて女はきつい嫌いでござります。どふぞお許しなされて下さりませ。

(亭主) へおのれ、その爪でそこら中ひつかきおつたであろう。七両二分のほかに、膏葉代をも取らねばならぬ。

(女房) へほんに、いやらしい。わたしを鬼が島へ連れていつて女房にするのなんのと、わたしが奇人(鬼神)ではあるまいし、鬼の女房になるものかへ。

(鬼) へ私はこれでも若い鬼共の世話をもいたして、小口も大きく者でござりますから、鬼仲間でも立てらるゝ者でござります、こんなことが仲間へ知れると外聞が悪いに。どふぞ慈悲に許して下さりませ。ちよつと、かみさまへ抱きついたばつかりで、とんだめにあひます。

### 【三丁裏・四丁表】

かの亭主言ふやう、七両二分の代わりに剣ぎ取ろふと言ひても、裸なり。この上は、その方の禪を取るべし。鬼の禪は、虎の皮なれば、捨て売りにしても、二両や三両にはなるべし。それにて見すべし。早々外して置いて行けと聞くより、鬼は涙を流し、この禪を取られ、ふりにては外聞悪く、国へとても帰られず。その上、昔の鬼は皆、虎の皮の禪をいたせし由なれども、近年はなか／＼さやうのことにてはなく、私の禪はこの節分



図14 『寿福請取帳』 三丁裏・四丁裏、麻疹神図 (右上)

の晴れにとて、冬年やうくのことにて工面いたし山鯨の皮にてこしらへたる禪、なか／＼銭になるものではなし。これはごめん下さりませ、と言へば、亭主聞かず、いや／＼例へ山鯨の皮にもせよ、俺が敷皮にでもするから、それを置いてゆけ、その代はり、俺が越中禪の古いのでもやらうと言へば、鬼いよ／＼迷惑がり、ありがたうはござりますが、私も鬼中で小口もさく男、まさか越中禪では鬼中へ面が出されませぬ。どうぞ、これは幾重もごめん下さりませと、いろ／＼謝れども、亭主一向聞き入れず、この上はその方の首を取るより仕方なしと脇差しを取つてひねくり回す所へ、いづくともなく鬚むき／＼とむさくろしき瘦せがれたるもの出きたり。亭主の前に跪きて、私は麻疹とて麻疹の神でござりますが、この鬼とは同じ魔性のもの仲間、普段西の海で心安くいたすもの故、これが難儀を先刻より庭の隅へ屈みゐて、請け給はりました、畢竟あなたが美しいかみさまをお持ちなされてござるから起つたこと、私に免じてぶぞ御免なされて下さりませ。その代はりには、あなた方御夫婦もまだお年若で麻疹前でござりませうから、私請けこんで御夫婦に子供衆残らず、麻疹を軽くいたさせますから、それで御了見下さりませ、と言ふ故、亭主

やうく納得して鬼をば許して帰しける。

(鬼)へハイくあなたの越中禪を頂戴いたしますはありますがたふござりますが、私この皮の禪をいたしておるのもいわくがござります。私は疝氣もちでござりますから、ありやうはそれで、腰の温まるやうにと皮の禪をいたしておるのでございます。

(麻疹の神) 麻へどふぞ私の挨拶で、この度は御免なされて下さりませ。その代はり重ねてはきつと慎ませませう。しかし鬼はたしなませますけれど、この後ひよつと、かみ様の方から鬼の所へ駆けだしてござるまいものでもないから、かみ様へもよくそふおつしやつて、御意見なさるがよい。恋は思案の外と申すから、そこらの所も御油断なされますな。

#### 【四丁裏・五丁表】

麻疹の神、この家の夫婦子供の麻疹を軽くさせんと請け合ひたることなれば、すぐさまこの家にとまりて、見れば見るほど女房の美しさ、鬼の惚れたるも理なりと、麻疹の神も心持ち味になりて、まづ亭主と子供に先へ麻疹を患わせ、女房ばかり後

へ残しておき、亭主の寝てゐる陰へ回りては、女房をとらへて、いやらしく仕掛けくどきけれども、女房はつんくとして一向に取り合はざれば、麻疹の神、やつきとなりてたちまち悪心を起し、亭主ある故わが心には従はじと思ひて、この上は亭主に麻疹を重くさせ殺してしまい、その上にて、いやおふ言わせず女を手に入れんとて、それより亭主子供の麻疹重くなるやうに仕掛けるが、この夫婦はじめ子供まで節分の夜十八軒の柵を煎じ飲みたる故、思ひの外に軽くして麻疹の神は重くさせんといふく骨を折りけれども、とかくその甲斐もなく一向苦しみになく軽き体に、麻疹の神はいかゞはせんと氣を揉みける。

(麻疹の神)へ貴様に麻疹を滅多に患はしてたまるものか。

わしがこれほどに思ひ思っているものを。ひよつと貴様が麻疹を病むと七十五日待たねばならぬ。それだから、麻疹を患はぬ先にわしの言ふことを聞いてくれる氣はないか。

さりとて心強い。わしがこの臍の下の熱氣をさまして下され。

(女房)へヤやくこの麻疹さんはいやらしい。お前も七兩二分はありはせまいに。そんなことはよしに升麻葛根湯。

いふだけが無駄といふもの。飯の上の敗毒散があきますよ。



図15 『寿福請取帳』五丁裏、麻疹神と邪風の神図（上が麻疹神）

【五丁裏・六丁表】

\*この見開きは、右、左で場面を分ける。

麻疹の神はいろ／＼に骨を折れども、棧のまじないにて、とかく亭主の麻疹重くならねば、麻疹の神工夫して、これは風をひかせ冷へさするにしくはなしと、風の神を頼めば、同じ魔物仲間の風の神請けこみ、それは我ら持ち前なり、風をひかせ風熱の邪気をもつて苦しめやらんと、やがて風の袋を開けば、病人の方へ風吹くとそのま、病人風にあたり、頭痛して苦しむを、ゑたりと風の神なをも袋を開けば、風熱の邪気無性やたらに飛び出て、病人の伏したる屏風の内へ飛び入りける。

（風の神）へなんと奇妙か／＼人に風をひかせてやるかはり、わしに酒の後をひかせて下さい。せつかく今飲んだ酒が袋の口を開けたら皆さめてしまつた。

風の神は、麻疹の神に頼まれ、病人に風をひかせ、風熱にて苦しめんと、この家につきそひるたるが、看病する女房の美しきを見れば見るほど、風の神も味な気になり、これは麻疹の神が惚れたも道理、器量といひ、その取りなりしほらしく、愛敬は、ぼと／＼とこぼる、ばかり。これはこたへられぬと、麻疹の神の見ぬ間に、風の神、女房をとらへて、これ／＼かみ様、わしは今までは隠れていたが、驚かしやるな。わしは、風の神、麻疹の神に頼まれ、この亭主に風を当て、熱を出して苦しませつもの所、あまりと言へばこなたの愛しさに、今から病人に風は当てぬほどに、その代わり、わしの言ふことを聞いて下され。わしは、そなたに北（来た）風さと、厚かましくも、口説きける。

（風の神）へおれが風で首筋元がぞつとするほど惚れた病は鍾馗さんでも、敗毒散でも治らぬ。そなたの薬、たつた一服で。風の神がこの思ひ、発散するのだ。さあ／＼いや



な風にも、なびかんせく。

【六丁裏・七丁表】

風の神女房に惚れてより、亭主に風も当てねば、麻疹の神腹を立て気をつけて見るに、風の神女房をとらへいやらしき様子に、麻疹の神、焼き餅にてやつきとなり、序病の熱のごとく、くはつくと怒り立ちて、仲間割れとなりけるに、風の神はおかしく、なをもかの女房にじやらつき、麻疹の神をじらしける故、いよ／＼腹を立て、せつかく俺が色にするつもり所 邪魔をするときかぬと言へば、風の神、いや／＼貴様より俺が色だと、争ひ喧嘩となり手づかみあへば、以前節分の夜逃げ去りし鬼、とかくこの家の女房に心残り、うか／＼とまたこの所へ来たり。先刻より忍び入りて、この様子を聞き飛んで出で、この麻疹の神めが、惚れたのは俺が先だよ、俺をばおためごかしにはぶひてしまい、おのれが色にしよふとはさせぬ、と喧嘩は三つになりてつかみ合ひ、大騒ぎをやらかしかける。

(鬼) おにへせつかく俺が足をつけておいたを、こいつらは太い奴らだ。おいらは辛い鬼でも心まで鬼ではないから、鬼神に横道なしで、今に女を俺が手に入れて鬼一口にせし

めることは、鬼に金棒、うぬらに鼻をあかしてやるのだ。しかし、そううまくいけばよいが、この三人、どれも／＼もてぬ面つき、できぬことは請け合い。それよりも、富の札を買う方がまだまし、であらふかしらぬ。

(麻疹の神) はしかへエ、うぬらがやうな鬼どもはお呼びのなひこと、こつちはうぬらよりか気がきいてゐて、はしかい(敏捷)といふものだから、はしか「確か」に俺と色になるには違ひはない。うぬらは、はしかいて「恥かいて」引つ込むだらうに。業曝しなうぬらを相手に、はしかなひ「しがない」はしか喧嘩「はした喧嘩」をするじゃアないが、あんまりだから、鬼の目に涙をこぼさせてやるのだ。

(風の神) かぜへこの麻疹めが、悪く洒落る。そふ言つても風の神のおかげには、あの女の言ふには、男がよふて風持ち(金持ち)でと俺がことを言ひおつたから、おつつけあの髪めが胴腹へ風穴を開けてみせる。地獄の沙汰も風(金)しだい、とても風持ち(金持ち)にはおよばまい。なんとして／＼。

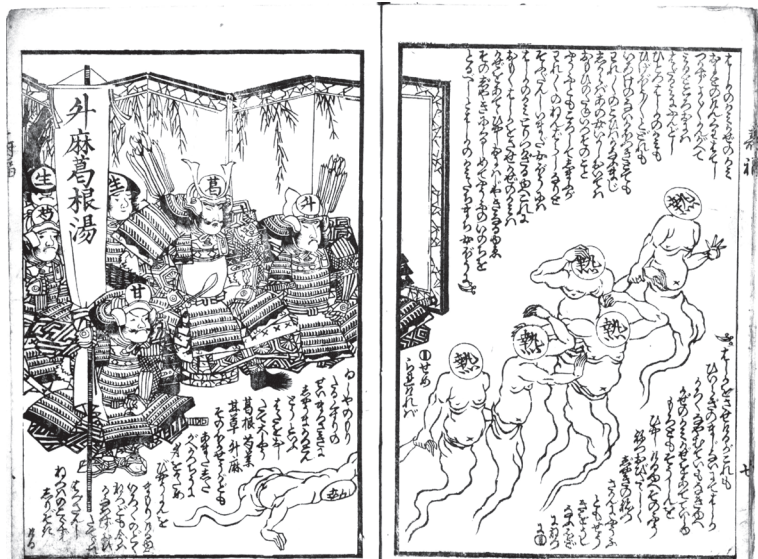


図16 『寿福請取帳』 七丁裏・八丁裏、升麻葛根湯図(左)

【七丁裏・八丁表】

麻疹の神、風の神、鬼との喧嘩果てしつかず、よく考へてみるところ、鬼は裸身に褌一つ、麻疹の神も鬚ぼうくと、どれも色気の無い顔つき。とても我々の恋は叶ふまじ、しからばあの女、生かしておいては思ひの種、いつそのこと、夫婦もろとも殺してしまふが我々の念晴らしなりと相談し、未だ女房には麻疹の神取り憑かざる故、これに重く麻疹をさせ、風の神は風を当て、冷やし、鬼は邪気なる故、その邪気に苦しめて夫婦の命をとるべしと、麻疹の神たちまち女房に麻疹をさせけるが、これも終のまじないにて、麻疹軽く、悩む体もなき故、風の神、風を当て、亭主諸共、総身を冷やしける故、その風熱おびたしく、邪気の熱盛んに、夫婦とも正気を失ふ程に、熱に責められければ、医者 of 盛りたる葉の精、真つ先に升麻葛根湯といふ旗を押して立て、大将葛根、芍薬、甘草、升麻、その外生姜とも数多徒へ、甲冑に身をかため、病人を守りける故、色々の毒熱ども、今はかなはず、追ひたてられ発散し、熱は残らず退きける。

(旗) 升麻葛根湯

【八丁裏・九丁表】

亭主このほど麻疹にて毒熱強く、讒言ばかり言ひて、夢中となり、苦しめし所、升麻葛根湯の効能にて、熱さつぱりとさめければ、今まで夢中となりしも、たちまち正氣〔鍾馗〕となりたる顔。久しく髪もとかざれば、おどろの如くに振り乱し、鬚ぼうくと麻疹の後にて顔は赤く、おそろしき顔色となり、熱さめて鍾馗〔正氣〕となりければ、悪神共、胆をつぶし、鍾馗〔正氣〕となりてはかなはじと、風の神、尻に帆をかけて逃げ出せば、麻疹の神もうろたへ出し、一目散に逃げてゆく。鬼はもとより節分の夜、この亭主の手並に懲たることなれば、これは許せと飛び出して、西の海へと逃げてゆく。さてこそ鍾馗は魔除けと言ふことか、ることをやいふなるべし。

(亭主) へおのれら憎ひ奴ら、俺が嬢を嘲扇坊にしやアがつた。一人前七両二分づ、おいてゆけ。今度、うせをると、ぜび七両二分とらねば聞かぬぞ。

(鬼) へハイく、もふ今度から参りますまい。有り様は鍾馗様より、その七両二分が怖い。

(麻疹の神) へハイく。麻疹の神、只今逃げ出します。そのやうにお熱が冷めたら、これからはお肥立ちなさるばか

り。決して毒なものはあがりません。おかみ様も麻疹なれば、七十五日はきつとお慎みなさりませ。もふくこれに懲り果てました。これからどんな美しいおかみ様を持つてござる御方があらふとま、決して惚れはいたさず、随分軽くなさるやうにいたしますから、もふくごめんく。(風の神) へ今までは夢中作左衛門でよかつたが、熱が冷めて正氣となつてはかなはぬく。

【九丁裏・十丁表】

さても夫婦子供、皆々まじないのおかげにて、麻疹を軽くして仕舞ひ、段々肥立ちて日数も立ちければ、食物もはや何を食べひても氣遣ひなく、亭主酒好き故、最早飲みてもよかるべきやと医者に尋ねて許されければ、久しふりにて、夫婦差し向かひ、寝酒の楽しみ、麻疹の時を思ひ出せば、女房鬼に惚れられ、また麻疹の神にも口説かれ、風の神にも口説かれたるが、女房一向に受けつけず、今宵は久しぶりなりと、亭主口説きければ、早速に承知して、この夫婦仲良く、次第に家富み栄へ、繁盛し、寿命長く、子孫長久しけるぞ。めでたしく。

(女房) へほんに、麻疹といふものは、とんだ苦しいものだと聞きました。そのやうにもないものでござります。

(亭主)へ痲瘡は見目定め、痲疹は命定めと言ふが、そんなもわしも子供、皆軽く仕舞つたは金を拾つたやうなものだ。めでたいく。

へそなたも痲疹でだいぶん顔が荒れたよふな。これからは、南伝馬町の稲荷新道の仙女香を買つて顔につけるがよい。そふするとじきに美しくなるから。

### 【十丁裏】

先年故ありて、甲斐の徳本老の遺書なりとて一見せし中に、痲疹の事見へたるを、この度出板いたし候。外題は、

痲疹養生伝 全一冊

此書には痲疹の養生、また禁物の品々、苦しからぬ食物、それ／＼に詳しく記し、中にも至つて毒なるものは、その忌むべき日数までも委細に記し有之候。痲疹多くは食物にて誤ちあるものなれば、この書によりて、万事を心得給ふ時は、決して難なし。御最寄りの本店にて、痲疹養生伝と御尋ね御高覧あるべし。

△痲疹奇法葛柳湯

痲疹の大名薬なり、本町四丁目近江屋久七、横山町二丁目大

坂屋半蔵、小伝馬町三丁目近江屋幸七、その外所々取次御座候。御最寄りの方にて、御求め下さるべく候。

国安画「印」

十返舎一九著「印」

【十一丁表・裏】 \*原文通り

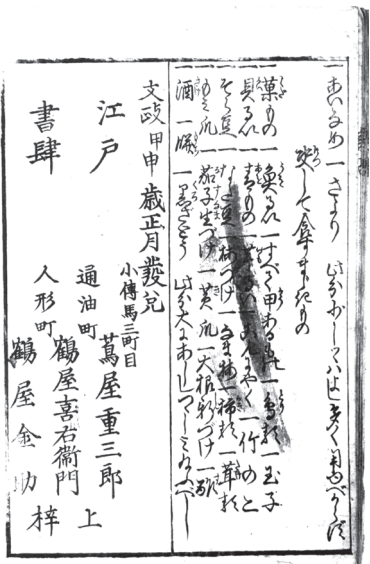
伏稟

此節痲疹流行に付、此草紙御一覽の御方々へ為冥加はしか能毒この所へ相しるし奉入御覽候。尚、くわしきは痲疹養生伝と申小冊先達而出板仕候間、もよりの書肆にて御求めなされ御覽可被下様奉希上候。

痲疹食物よろしきもの

- 一 やき塩 一 かんびやう 一 ほし大根 一 ゆりの根
- 一 にんじん
- 一 かたくり 一 古みそ漬 一 上くず 一 ころろ豆
- 一 氷こんにやく
- 一 白瓜 一 冬瓜 一 いんげん 一 十六さ、げ
- 一 ひじき

- 一 小豆 一 やゑなり 一 水あめ 一 白せつかう
- 一 麩 これは酒 ふはあしし
- 一 牛房 これは出そろふ 一 うどん 一 ほし菜 まではよし
- 一 多食 おくしよ してあしきもの
- 一 白ざとう 一 梅ぼし 一 かつほぶし 一 梨子 む
- 一 鮑 あわび 一 きす
- 一 あいなめ 一 さより 此分少しつ、はよし、多く用ゆべからず
- 一 決 けつ して食すまじきもの
- 一 菓 くだ もの 一 魚 うを るい 一 すべて甲 かう あるもの
- 一 鳥 とり 類 一 玉子
- 一 貝 かい るい 一 青 あを もの 一 芋 いも るい 一 こん こん にやく
- 一 竹 たけ のこ
- 一 そら豆 一 なた豆 一 梅 うめ づけ 一 なま梅
- 一 柿 かき 類 一 茸 たけ 類
- 一 もみ瓜 一 茄子 なす 生 なま づけ 一 黄 き 瓜 一 大根 だいこん 新 あたら づけ
- 一 酢 す
- 一 酒 さけ 一 餅 もち 一 黒 くろ ざとう 此分大にあしし、つ、しみ給ふべし。



文政 甲申 歳正月発兌

小伝馬三町目 葛屋重三郎

通油町 鶴屋喜右衛門

人形町 鶴屋金助

上 梓

図17 『寿福請取帳』刊記

【十二丁表・裏】

\*京橋南伝馬町三丁目 坂本氏の「御かほの妙薬 美艶びえんせちん仙女せんぢよ香」(一)

包 代四十八孔)の詳しい由来と効能。天保改革の出版統制までこの時期の多くの戯作に広告されている化粧品である。大きく欠損しているため翻字を割愛する。なお、一丁にわたる宣伝文の最後には、口上として、十包以上購入すれば、「当時三芝居さんしばい立たてもの役者」の自筆の扇子を景物に差し上げると宣伝されている。

【注】

- (1) 津田真弓「疱瘡絵本『雛鶴笹湯寿』考」、『国語国文』、七八一七、二〇〇九年七月)
- (2) 津田真弓「疱瘡絵本『疱瘡請合軽口噺』考」。なお、国文学研究資料館「古典籍総合目録データベース」では「疱瘡請負」と登録されているが、題簽や広告に記載の角書かくがきによって「請合」とする。
- (3) 国際会議「Healing the People: Popularizing and Printing Medicine in Edo Japan」主催アンジェリカ コッホ)

(4)

疫病や疱瘡(ほうそう)などを防ぐまじないとして、鮑(あわび)の殻の内側や木札などに書いて門戸にはった文句。『日本国語大辞典』、JapanKnowledge 所収、二〇二二年十一月十五日閲覧)

(5)

国文学研究資料館「古典籍総合目録データベース」などには享和三年で出ているが、絵師の年齢から考えてありえない。棚橋正博『黄表紙総覧』(後編一九一頁、青裳堂書店、一九八九年)など先行研究に従って旧稿(注1)の年表では天保七年にしたが、ライデン大学での発表でそれを訂正、文政七年とした。詳細は別の機会に譲る。

(6)

国会図書館デジタルコレクション(京乙ー163、DOI: 10.11501/2534172。翻刻『式亭三馬集』(棚橋正博、国書刊行会、一九九二年)

(7)

幣を背中に刺した、瘦老で半裸の行者のような姿をしている。一九らとも違う作者自身のイメージかと思われる。

付記：貴重な資料の翻刻をお許しくださった大東急記念文庫、杏雨書屋に感謝申し上げます。本稿は、科研費基盤研究(B)19H01231 および、慶應義塾大学学事振興資金(二〇二二年度)の成果による。

